



熊本市田迎町

西 正雄さん(94歳)

正広さん(69歳)

俊夫さん(36歳)

“華”をつくる人びと。



愛の証しとして恋人たちの胸を飾る赤いバラ。パティ会場を華やかに彩る黄色やピンクのバラ。バラは、その甘い香りと、艶やかな姿で、私たちに夢と、ときめきを与えてくれる。花き栽培では、全国でもトップレベルの熊本。バラの栽培も各地で行われている。田迎町の西さんご一家もその生産農家のひとつ。7棟のハウスで7種類のバラが作られている。バラと言えば、まず頭に浮かぶのが「高価な花」ということ。ではなぜ

ほかの花より高いのか？そんな素朴な疑問を持ちながら、西さんご一家の栽培の様子を見せてもらった。まず、朝6時、花の切り取りが始まる。まだ、つぼみがようやくふくらんだ程度のバラが俊夫さんや奥さんの手に次々と切り取られていく。すぐに開いてしまうバラは、このくらいの時に切り取ってちょうどいいのだそうだ。ハウスの中は、常に18〜20度に保たれている。切り取られたバラは、長さを揃え、出荷まで冷蔵庫へ。冷蔵庫の温度計の目盛りは5度Cを指している。生きものだから、土壌や病気の注意は当然だが、そのほかに、この環境づくり。夏場の6〜8月をのぞいて出荷日は、毎週月・水・金曜日だから、ほぼ一年中同じ条件を、このデリケートな花のために保っておかなければならないわけだ。まさに、育ちの良さが、価格の良さということになるのかも知れない。

西家は、この地域では、もっとも早くバラ作りを始めた一軒だ。もともと正雄さんの前代から「肥後つばき」の栽培に力を入れるなど、花とはゆかりの深かったご一家。戦前から、趣味程度にバラやアマリリスをつくっていたが、戦後の洋もの嗜好の高まりで需要が増大。生産の方も徐々に手を広げていった。他にも同じ頃、洋ものの花づくりを手がけた農家があったが、コストと価格のバランスがとれず、つぶれていったと

いう。「好きが高じて」そんな気負わない地道さが功を奏した。西さんの屋敷の端には、江戸時代から伝わると言われるお稲荷さんがある。おそらく、豊作を祈ってつくられたものだろう。今でも、年に2回、初午と出穂祭りには、親類を集めてお祭りをする。

「一反の稲刈りを一日かかってやっていた」という正雄さん。「設備投資でつぶれるより、まずできることから」という正広さん。そして「仲間たちと、東京のニーズも勉強している」俊夫さん。それぞれ

の世代がそれぞれの時代に合った堅実な農業を。その一家には流れているようだ。華やかな美しさの裏にある地味な生産の努力。「花のころは、安らぎ」という俊夫さんの言葉どおり、今日も、様々な場所で、西さんご一家のつくられたバラが、人々の心を温めていることだろう。



フミ子さん・美代子さん



正広さん



正雄さん



俊夫さん・美代子さんご夫妻

